

## 聖木曜日聖木曜日・主の晩さんの夕べのミサ

ヨハネ 13・1-15

2012. 4. 5

イエズス会助祭 小暮康久

今日の聖木曜日から主のご復活までを、教会は伝統的に「聖なる三日間」と呼んできました。それはこの「聖なる三日間」が、私たちキリスト者にとって、最も大切なイエス様の記憶を記念しているからです。

私たちが毎日曜日に参加しているミサは、年間の典礼暦に従って、それぞれの季節に固有の祝日を祝う形になっています。それは、この年間の暦を通して、イエス様の生涯を思い起こすためです。そしてこの暦の頂点に位置するのが、今日からはじまる「聖なる三日間」なのです。つまり最後の晩餐から復活までの「聖なる三日間」とは、イエス様の生涯における頂点であり、私たちキリスト者にとって最も大切なイエス様の記憶なのです。

その「聖なる三日間」の始まり、今日、聖木曜日の福音では、イエス様が弟子たちの足を洗う姿を描くヨハネ福音書が朗読されます。しかし、このいわゆる「洗足」について語っているのはヨハネ福音書だけで、共観福音書とよばれる他のマタイ、マルコ、ルカにはこの記述がありません。共観福音書はその代わりに最後の晩の出来事として、「主の晩餐の制定」を語ります。

それでは、ヨハネ福音書は「主の晩餐の制定」を無視しているのかということではなくて、ヨハネは「主の晩餐の制定」を、あえて最後の晩の場面としてではなく6章で語ります。「わたしは命のパンである。…わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。」という箇所です。しかしそれが意味として「主の晩餐の制定」であることは、この6章の冒頭に「ユダヤ人の祭りである過越祭が近づいていた。」という導入の言葉が置かれていることからわかります。6章の「命のパン」の説教は、「過越祭」の、あの最後の晩の過越しの食事の、その眺めの中で語られているのです。

しかし、ちょっと不思議に思わないでしょうか。「聖なる三日間」の始まりである聖木曜日の福音に、どうしてヨハネ福音書にしか語られていない「洗足」が選ばれているのか。お話ししたように、「聖なる三日間」はイエス様の生涯を思い起す年間の典礼暦の頂点に位置するものであり、ミサ典礼の起源である「主

の晩餐の制定」こそが、聖木曜日の福音箇所として自然な感じがすると思うのです。

確かに教会は、第二朗読にパウロのコリントの教会への手紙を選び、その中で、「主の晩餐の制定」を私たちに思い起こさせます。

しかし、教会はこのヨハネ福音書にしか語られていない「洗足」をイエス様の大切な記憶として、聖木曜日の福音箇所として選び、それに続く「洗足式」も大切に受け継いできたのです。イエス様の最後の晩の出来事、つまり「主の晩餐」と「洗足」との間にはどんな関係があるのでしょうか。そして教会は何故、聖木曜日の福音箇所として「洗足」を選んだのでしょうか。

そのことを味わうために、初代教会と聖書の関係について少し見てみたいと思います。

19世紀から「聖書学」という分野の研究が盛んになり、そこからいろいろなことが見えてくるようになりました。その中で、聖書、特に福音書が書かれたのは、教会が誕生してから実に40年～60年後であることが分かっています。つまり、その間、初代教会は福音書なしに自分たちの信仰を実践していたのです。その実践の中心にあったのは、使徒から継承した教えを守ること、そして、典礼、つまりミサの実践です。当時、それは「パン裂き」とか「主の晩餐」と呼ばれていました。使徒言行録やパウロの手紙などがそれらを伝えています。誕生直後の教会の姿を描く使徒言行録2:42には次のように書かれています。

「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。」

教会が誕生した直後から、この「パン裂き」とか「主の晩餐」と呼ばれた典礼の実践が始まりました。その中で彼らはイエスを「キュリオス＝主」と呼び、父なる神とともに礼拝の対象としていたのです。これは唯一の主、ヤハウエのみを礼拝する厳格な一神教であるユダヤ教においては考えられない宗教的実践でした。福音書が書かれるずっと前から、各地に広がったそれぞれの教会共同体には、このような実践の蓄積、すなわち伝承があったのです。

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネのそれぞれの福音書には、このように、それぞれの教会共同体が受け継いだ伝承が反映されていると考えられています。それぞれの福音書の間には個性というか多様性が見られるのは、この伝承の多様性のためです。

ここでようやく今日の「主の晩餐」と「洗足」との関係という問題に入

ることができるのですが、結論からいうと、マタイ、マルコ、ルカの共観福音書が最後の晩の出来事として語る「主の晩餐の制定」は、各地の教会共同体に蓄積、伝承されていた典礼の実践、つまり「典礼伝承」を語っていると考えられます。それに対して、ヨハネ福音書が語る「洗足」は、死を目前にしたイエス様の告別の言葉、告別説教を伴ったイエス様の遺言の伝承、「遺言伝承」を語っていると考えられます。

「主の晩餐」と「洗足」、「典礼伝承」と「遺言伝承」、一見すると全く別の伝承のように思えますが、しかし、それはコインの表と裏のように一つです。何故なら「典礼」も「遺言」も、イエス様が私たちのために残してくれたものという点で一つだからです。

イエス様は「主の晩餐」を制定し、私たちの命の糧として「聖体の秘跡」を残して下さいました。私たちは日曜日ごとのミサの中で、主の晩餐を思い起し、そこでイエス様ご自身を「命のパン」として頂くことで、養われ、助けられ、愛の完成へと向かって歩んでいきます。つまり、「聖体の秘跡」の究極の目的は、私たちが愛の完成に至ることにあります。

しかし、「秘跡」の究極の目的である、この愛の完成は、ただ「秘跡」を受けるということだけで実現するわけではありません。愛の完成とは、具体的にこの世において「互いに愛し合う」ということを実現することだからです。ですから私たちは、「秘跡」に助けられながら、自らの生き方において「互いに愛し合う」ことを実践していかなければならないのです。その生き方の模範をイエス様は遺言として残して下さったのです。それが今日の福音の「洗足」とそれに続く遺言です。

イエス様は自ら「僕」のようになって弟子たちの足を洗います。その姿を示したのは、これから語るご自分の遺言が、その姿と切り離すことができないものだったからです。イエス様の遺言を一言で要約するならば、「わたしがあなたがたにした通りに、あなたがたも仕える者になりなさい。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。」ということです。この「仕える者になりなさい」という「遺言伝承」は、ルカ福音書にも語られています。仕えるイエス様の姿に倣い、それを自らの生き方において実践していくことのうちにこそ、「秘跡」の究極の目的である愛の完成の実現もあること、そしてそこにこそ「本当の幸い」があること、そこにイエス様はそこに私たちを招いておられる、これがイエス様の遺言であり、「洗足」の意味なのです。

「主の晩餐の制定」と「洗足」とは、つまりは「秘跡」と「イエス様に倣う

生き方の実践」のことです。それはコインの表と裏のように一つであり、私たちキリスト者にとってなくてはならないものです。だからこそ、教会は、第二朗読と福音書の箇所としてこの二つを選んでいるのです。

この「聖なる三日間」、最も大切なイエス様の記憶を思い起し、イエス様が招いておられる本当の愛に、私たちもイエス様と共に過越していくことができますように、その恵みを共に祈ってまいりましょう。